

2022年8月に実施された噴火湾沿岸の環境調査結果のうち、森（8/4, 8/19）、八雲（8/25）、虻田（8/4, 8/25）、伊達（8/26）の水温・塩分の観測結果をとりまとめました。（本情報は函館水産試験場のHPからもご覧頂けます） <http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/hakodate/>。

【水温・塩分の特徴】 8月の調査では概ね深度10m以浅に河川水の影響を受けた夏季噴火湾表層水（塩分32以下）が見られます（図1）。8月下旬の虻田と伊達で水深15m以深に津軽暖流水（水温6℃以上、塩分33.6以上）が分布していることが確認されており、湾全域への流入が進むと思われます。

【有害プランクトンの出現状況】 昨年度東で大きな問題となったカレニア・セリフォルミスや昨年室蘭港で赤潮を形成したカレニア・ミキモトイなどホタテガイにとって有害な可能性がある有害赤潮プランクトンは検出されませんでした。

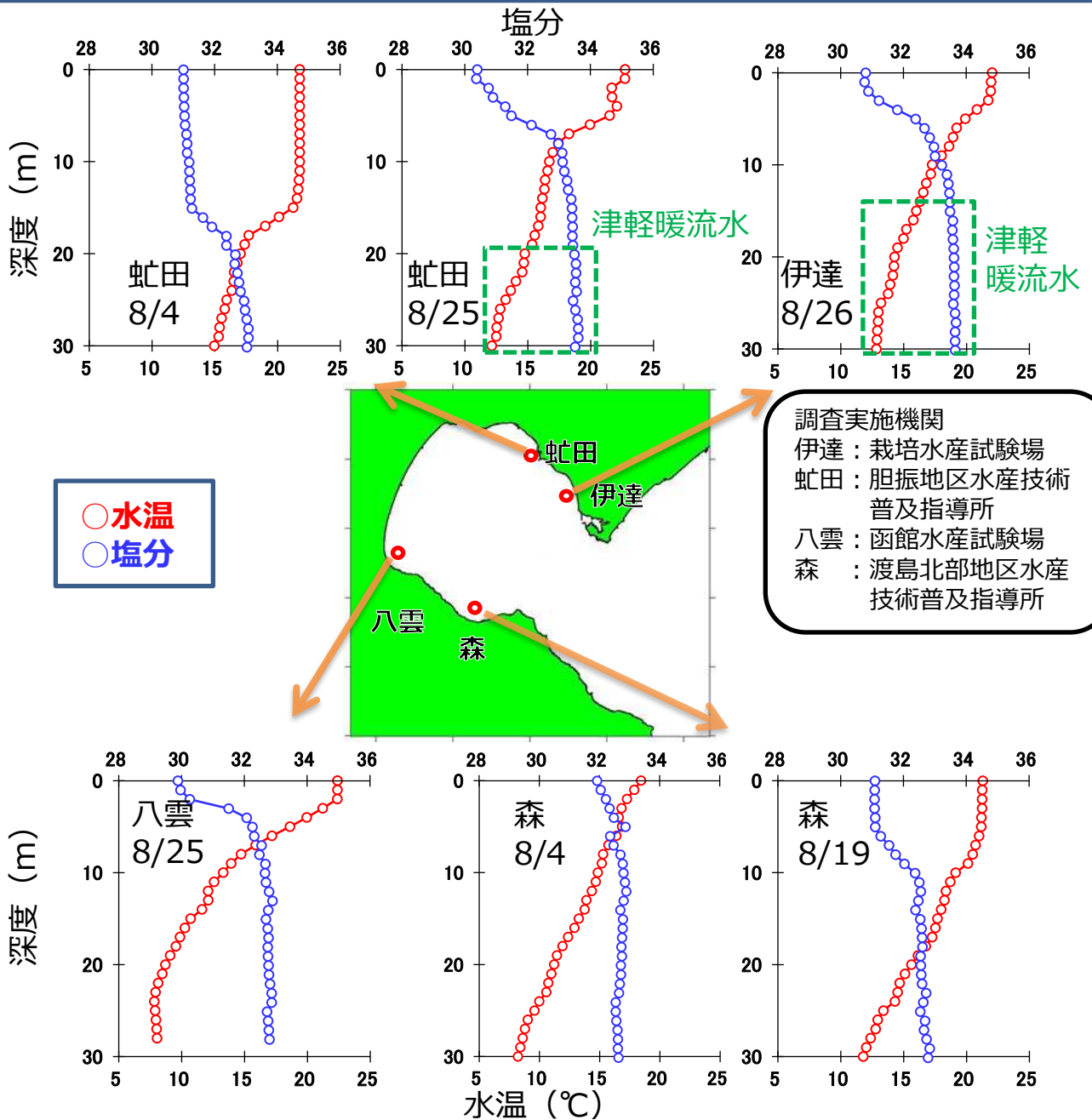


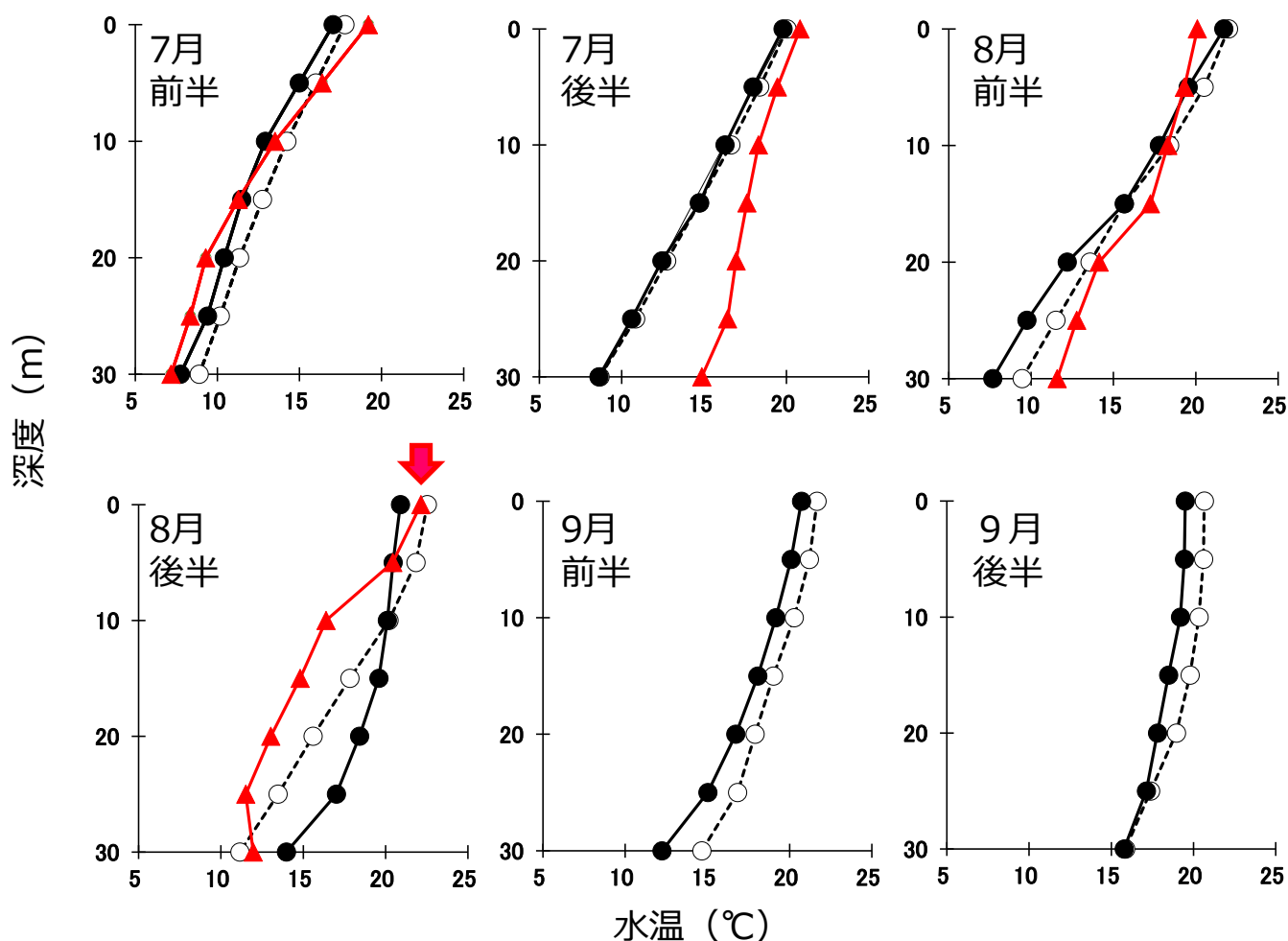
図1 噴火湾沿岸の水温・塩分の鉛直分布

※本調査の一部および情報配信は北海道はたて漁業振興協会からの委託研究により実施しています。

【ホタテガイ養殖関係者向け①】

【養殖ホタテガイの「稚貝のでき」と夏季の環境条件の関係】 夏季の水温の鉛直分布について、「稚貝のできが良かった年」と「稚貝のできが悪かった年」を比較すると（図2）、稚貝のできが悪かった年は8月後半の水温の深度差が小さく、成層が弱い条件となっています（赤矢印）。

【今年の夏季の環境条件】 今年の8月後半は表層で水温が高い一方、深い層で水温が低く、成層が強いという点で「稚貝のできが良かった年」と似た特徴が見られます（赤矢印）。ただし、昨年は「稚貝のできが悪かった年」と似た環境の特徴が見られたにも関わらず、実際の稚貝のできは良くなりました。このように「8月の成層の強弱」だけで「稚貝のできの良否」を完全に予測できるとは言えません。今後もできるだけ稚貝にストレスを与えない作業・管理を心がけてください。



○稚貝のできが良かった年 ●稚貝のできが悪かった年 ▲2022年

図2 噴火湾沿岸の夏季の水温鉛直分布
2010年～2021年，虻田，八雲，森地区の1～2回/月の観測結果を各年各月の前後半の深度別に集計した。「稚貝のできが良かった年」および「稚貝のできが悪かった年」の平均値を示しています。

【養殖ホタテガイの「稚貝のでき」と管理方法の関係】 一昨年と昨年実施した、仮分散の収容枚数、本分散の時期、本分散の収容枚数を変化させて行った稚貝育成試験の結果から、「稚貝のでき」が良い年においても、**①本分散の時期を早めること（図3）、②本分散が遅れる時に収容枚数を少なくすること（図4）、は「稚貝のでき」を安定させる上で効果があります。**

(R3) 2021年の結果

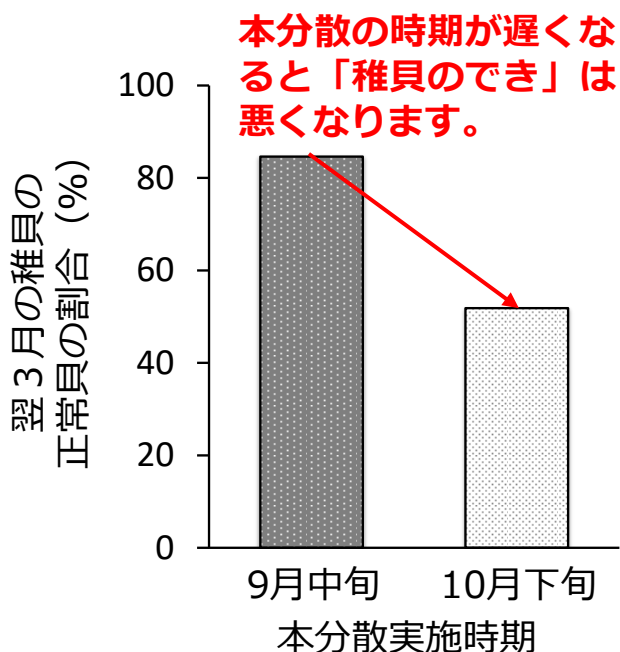


図3. 本分散を早い時期（9月中旬）と遅い時期（10月下旬）に実施した場合の「稚貝のでき」への影響。

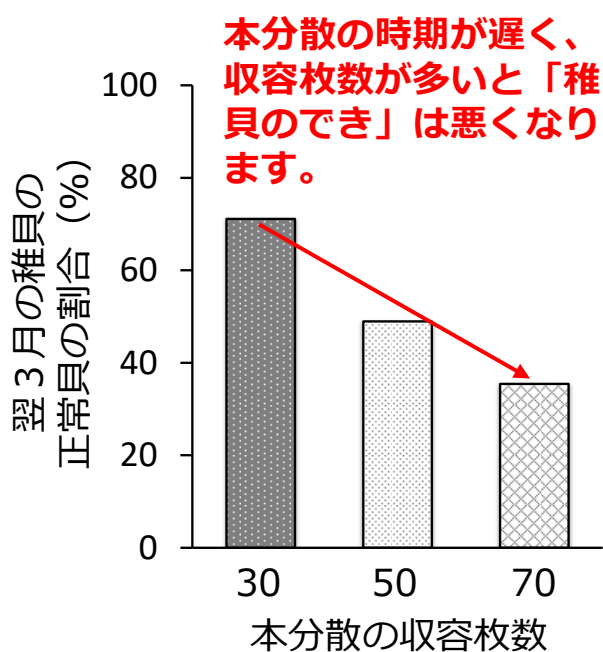


図4 本分散を遅い時期（10月下旬）に実施したときの収容枚数の「稚貝のでき」への影響。

稚貝育成試験の条件

- 種苗：地場産の同一種苗
- 施設：仮分散、本分散ともに同一桁内
- 仮分散：8月上旬に実施、収容枚数は2分ザブトン籠1段あたり150, 300, 600個体の3条件
- 本分散：9月前半と10月後半の2回に分けて実施、収容枚数は3分丸籠1段あたり30, 50, 70個体の3条件
- 3月前半に試験を終了して正常貝率を測定、複数段、複数条件の結果を平均化して示しています。

* この試験は、R3（2021）年に函館水産試験場、水産振興課が主体となり、渡島北部地区水産技術普及指導所、地元漁協および生産者の協力を得て実施しています。ご協力に感謝申し上げます。